

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第12回 ビクトル・ウガルテ・ファレロンス 氏 インスティトゥ・セルバンテス東京 館長

「バルセロナは“地中海のパリ”だと思います」

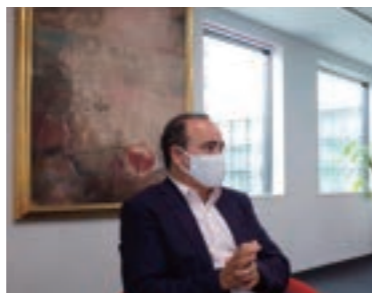


答えると「違うわよ。よく見るのよ。20個の青があるわ」という会話をしたのを覚えています。この祖母の画のブルーはシッチェスのブルーと言われていて有名です。白が際立つように使われているのです。

話は逸れますが、内戦時代に感動する話があったんですよ。祖父がバルセロナにおいできた飼犬「エスキピー」が2年後、ブルゴスにいた祖父の前に姿を現したのです！バルセロナから600キロもあるんですよ。どうやってきたのか？なぜブルゴスにいと分かったのか？一匹だけで血だらけになっていたそうです。この話は新聞にも取り上げられたんです。

AMICS 飼い主を探すエル・カミーノ！感動的な話ですね！ぜひまた時間をとっていただいで詳しく伺いたいです。さて2007年に東京で館長に就任されるまでの日本や日本文化との出会いはどのようだったのでしょうか

ビクトル 祖母は映画好き、日本好きでクロサワのファンでした。今はグラシア通りにもランプラ・カタルーニャにもありませんが、その頃は大きな映画館が何軒もあったし、マイナーな映画をかける小さな館もいくつもありません。まだバルセロナは観光都市ではなく、観光という点ではむしろシッチェスでした。それでもガウディが注目されたのは70年代以降バルセロナの観光都市化が始まると、目ぬき通りでは大きなスペースをとっていた映画館はどんどんホテルや大型のブランド店舗に変わってしまいます。シッチェスはいいですよ。モデルニスモの町です。サンティアゴ・ルシニョールの出身地でもあります。いい美術館もありますし、食事も美味しくお勧めです。



祖父母は何度も日本に旅行に行っていたんです。祖父が医者だったので医学会もあったのでしょうか。夫婦で訪れていたようです。まだアンカレッジ経由でしたよ。生け花が好きになって剣山を持ち帰って部屋に花を飾ったり、アート関係の書籍も家にはいっぱいありました。日本の子供達が脱いだ自分の服をきちっと畳んでおくのがとても印象深かったようで、祖母は「あなたもそうしなきゃダメなのよ」と繰り返し私に要求するようになりました。すごく清潔というか、整理整頓されているというのが、祖母の目に映った日本だったようです。そうやって私も子供でしたが祖母を通して自然に日本についてのイメージを持つようになりました。

AMICS ビクトルさんはイベント等を通じてカタルーニャ協会のメンバーにもおなじみです。生まれ育ち共にバルセロナとうかがっています。ご家族や小さい頃のバルセロナの様子からお話いただけますか。

ビクトル 私はバルセロナの祖父母の家で育ちました。グラシア通りから入ったティクタシオ通りとジローナ通りが交差するところです。いわゆるモデルニスモゾーンです。コンセプシオ教会やコンセプシオ市場がありました。小学校、中学校はバセオ・デ・グラシアを渡って学校に行くので、毎日ペドレラ（カサ・ミラ）を見てましたよ。当時は汚れて真っ黒なアパートメントでしたから、誰も価値を見出していませんでした。カサ・パトリオも注目されていませんでしたし、サグラダファミリアは財政難から建築工事は半ば放棄されたままでした。これらのガウディの建築が注目されるようになったのは私が15、16の頃、70年代に入ってからなんです。

祖父はバルセロナ生まれの医師です。祖父は30年代の内戦時に祖母と一緒にバルセロナを出てフランス経由でサン・セバスティアンに行き、そこからブルゴス（カスティーリャ地方）に住みました。あの時代は家族でもフランコ側、共和側に分かれたことがあったそうです。その頃有名なバルセロナの医者がサン・セバスティアンに移っていたので祖母はブルゴスからサン・セバスティアンに行って母を生まれました。母はその後バルセロナで育ち医師になりました。そしてバス出身の医師であった父と結婚します。うちは医師家系ですね。

私は祖母っ子で、彼女は（医師ではなく）画家でしたからよく美術館やギャラリーに連れて行かれました。「ビクトル、見てごらん。ここにブルーはいくつある？」という問いかけに「5つ。いや6つかな」と

AMICS 実際に東京で生活を始められてお気づきになった東京（日本）の良さ、バルセロナ（スペイン）の良さ、その違いなどをお聞かせください。

ビクトル 最初に私自身が来たのは2005年ですね。国際交流基金の招待で愛知万博（愛・地球博）のカタルーニャウィークにも参加しました。その頃はすでに日本についても多くの情報を持っていましたし、バルセロナでも日本人の知人ができていましたので、大きなギャップはなかったです。同基金のプログラムで、日本の地方の町や村を訪れることもできて良かったのですが、休む間もない強行スケジュールで、買い物好きな私には全くショッピングの時間がなかったのは拷問のようでした。メンバーのひとりがどうしても日曜日にミサに行きたいというのでようやく3時間くらい自由時間ができて、銀座のデパートに行きストレス解消したのを覚えています（笑）

AMICS 今年のサン・ジョルディの日イベントでは「カタルーニャのロマネスク芸術」と題してお話しいただきました。バルセロナ大学では美術史を専攻されたのですね。

ビクトル 大学ではロマネスク美術だけではなく、それに重なる宗教の宗派の歴史も研究しました。同じ時代やカテゴリーでも宗派ごとの多様性を理解しました。ギリシャ・ローマ時代の陶器も研究しましたし、一方で現代美術も学びました。バルセロナ大学のリウ先生に師事し、提出には至りませんでした。博士卒論のテーマは「中国の書道（漢字）と現代美術」に据えたんです。当時、東洋美術の先生がほとんどいなかったの、リウ先生を師事したい人がたくさんいました。中国語、日本語の勉強も始めましたし、書道も学びました。ミロをはじめ多くの西洋画家が、日本や中国の筆と墨を使うようになりました。

AMICS 日本の筆や墨はどういうところが画家たちに響いたのでしょうか？

ビクトル drippingsと現代アートでは呼ばれていますが、欧米人にとってポタポタと雫が散るような動きを表現できることが魅力だったのだと思います。筆使いによるかすれも魅力的なテクスチャーがです。そして筆を使うときの実際の腕の動きやジェスチャーにも惹かれたと考えています。フランスのアーティストですが「イブ・クライン・ブルー」や「モノクロニズム」で有名なイブ・クラインがそうですね。墨のモノクロームの可能性を追求した彼は、講道館で柔道の黒帯も取得していたんですよ。バルセロナでは私も書道を学びましたが、まず「一」を書くのに苦労しましたね。そうそう、日本人の先生の生花のコースも取ったんですよ。「植物を持って来なさい」と言われて私はランプラスですごくたくさんのお花を買っていったんです。先生は「あーあ、あなた全然わかってないわね。ファリヤスの火祭りじゃないのよ！」と呆れていました（笑）

AMICS 文化という側面での日本とスペインの親交を進めるのがインスティトゥ・セルバンテスの目的であるわけですが、日本におけるカタルーニャへの、そしてカタルーニャ語への関心などどうお感じになっていますか？

ビクトル バルセロナはスペインの中で一番、日本の方が関心を持つ都市、行ってみたいと思っている場所ですよ。「スペインに行きたい！」と題したフォトコンテストをやってみました。半数以上はバルセロナ、もしくはカタルーニャの写真です。みなさんはバルセロナに芸術性を求められているんだと感じます。つまりバリのようなものを求められていると思うんです。「地中海のバリ」といったらいいと思います。もちろんガウディのおかげでもあります。さらにビジネスという意味でも日本からの投資の70%ほどはカタルーニャです。グーグルのアンケートでもヨーロッパで働きたいと思う都市のトップにはバルセロナがきています。セルバンテス東京ではカタルーニャ語の講座も設けていますが、コロナのせいもありこの夏は集まりませんでした。今後も継続していきますのでリアルな形で学

べるクラスをぜひご利用ください。

AMICS AMICSの読者にぜひ紹介したいバルセロナやカタルーニャのオススメの場所を教えてください。

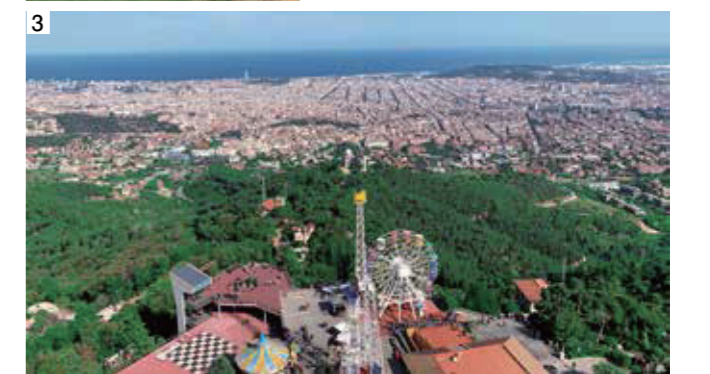
ビクトル 私の好きな場所を3つほどオススメします。ぜひ訪ねてみてください！

1 バルセロナ市内の散歩道として

Passeig de Sant Joan サン・ジュアン通り →
Passeig de Lluís Companys リュイス・コンパンチ通り →
シウタデラ公園（学生時代のガウディの装飾、シウタデラ動物園もある）



- 2 モンジュイックの丘
ミロ美術館、「市長の展望台」、植物園（サボテンなど熱帯植物も）
- 3 ティビダボの丘
創業1901年のレトロな遊園地がある。モンジュイックよりさらに高く見晴らしのいい場所で、バルセロナの街を一望、路面電車とケーブルカーで丘に到着。



<AMICSの眼>

インタビューさせていただいた執務室にはおばあさまの描かれた画が3枚飾られている。それぞれが家族の時代を語っている。今回、内戦時からの家族の歴史やバルセロナの変遷をリアリティーを持ってお話しすることができた。祖父母を語れるということは大変貴重なことだとあらためて認識した。おばあちゃんっ子は魅力的なのだと思う。

（取材/文 原正彦）

ビクトル・ウガルテ・ファレロンス

1963年バルセロナ生まれ。バルセロナ大学にて美術史専攻で学士号取得。バルセロナ自治大学にて中国学修了。EADAビジネススクールにて会計学修了。スペイン及び中国にて民間企業で活躍した後、2001年スペイン国外務省管轄の公的機関であり、スペインにおけるアジア文化普及のための公的機関カサ・アジアのプログラミング・メセナディレクターに。その後インスティトゥ・セルバンテス東京センター設立準備に参加し、2007年10月同センター館長となる。2017年、市民功労勲章を受章。